

# 需要高まる脳卒中リハビリ

## 人材の育成が急務

脳卒中でまひした体の機能回復訓練をするリハビリテーションの需要が高まっている。新しい治療法を取り入れて成果を上げている病院もあるが、課題はマンパワーの確保。リハビリ科医や技能を備えた理学・作業療法士の育成が急務となっている。(林勝)

まひした左手に向かって思わず声が出た。「もつちよつと。開け、いけつ」。ゆつくりだが、指先が数秒、思い通りに動かした。

三重県伊賀市の田増富士男さん(69)は今年九月、農作業中に脳卒中で倒れた。一命は取り留めたが、左半身がまひに。十月半ば、藤田保健衛生大七栗サナトリウム(津市)にある回復期リハビリテーション病棟に入院した。



患者のまひした左腕のリハビリをサポートする作業療法士＝津市の藤田保健衛生大七栗サナトリウムで

### 全国的に病棟急増

## 時間、質「確保できない」

取り入れ、脳卒中による片まひ(半身不随の状態)の治療成績は向上。リハビリ科医と理学・作業療法士、看護師らが患者の状態を話し合い、リハビリの質を高めている。

園田茂病院長は「まひを『改善させる』ことと、まひしていない方の手足や装具などを使って『補助』ことをバランスよく併用し、日常生活への早期復帰

を目指している」と話す。

質の高いリハビリを支えるにはマンパワーが不可欠。同病院(二百十八床。うち回復期リハビリ病棟百六床)には、リハビリ科医が七人、理学療法士三十四人、作業療法士三十人、言語聴覚士八人がいる。専門看護師や介護福祉士も充実している。しかし、全国的にはリハビリ

医療機関が必要とする医師数を現在の医師数で割った値は、リハビリ科が一・二九倍と診療科別で最大。救急科(一・二八倍)や産科(一・二四倍)を上回った。

背景には、二〇〇〇年の診療報酬改定で新設された回復期リハビリ病棟の急増がある。全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会によると、今年三月

以上に、理学療法士二十人以上、作業療法士二十人以上を配置するよう求めている。

あるリハビリ科医は「最低限の人員しか配置できない病院もあり、患者一人にかけられる時間はわずか。これでは患者の回復力を引き出せない」と懸念する。

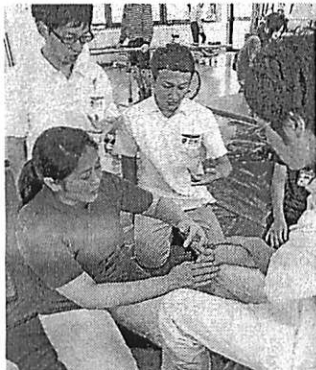
## 注目集める新療法

脳卒中によるまひの治療で高霧島リハビリテーションセンター(鹿児島県霧島市)のセナタ復療法」という新しいリハビリが注目されている。藤田保健衛生大七栗サナトリウムなど中部圏でも治療が行われている。

### 促通反復療法

回路を伝わり、筋肉を収縮させる。脳卒中で神経組織が壊れると、回路が断たれまひが起る。川平教授は、患者がまひした部分を動かそうと脳神経から信号が出て、受け手側の神経に届きにくいためにリハビリが困難になっていると考えた。そこで、患者の「動け」という意図に合わせて、その動きを実現す

る筋肉を治療者が手で直接刺激し、互いの神経のつながりこそ強化を促したイラスト。川平教授は同時に起きた神経の興奮はつながっていく。ただ動かすよう指導するだけの従来のリハビリは効果が悪く、誤りのない学習を繰り返して、神経回路を強化するのが重要」と説明する。



まひを改善させる「促通反復療法」の技術を学ぶ理学・作業療法士＝鹿児島県霧島市の鹿兒島大病院霧島リハビリテーションセンターで



## 神経回路を再建し強化

ただし、この療法には高い技術が治療者に求められる。一つ一つの運動に対応する筋肉を的確に刺激する手技が必要。同センターには、技術を学ぶよう全国から多くの理学・作業療法士らが訪れ、研さんに励んでいる。「ホンネ外来」は休みました。